様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　4 月　6 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2009
課題番号：１８３２０１２８
研究課題名（和文）弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究

研究課題名（英文）　The Pacific Route in the Yayoi and Kofun Periods- the cultural exchanges and the regional　relations

研究代表
清家　章（SEIKE　AKIRA）
高知大学・教育研究部・人文社会科学系・教授
研究者番号：４０３０３９９５

研究成果の概要（和文）：
南四国を中心とした太平洋沿岸交流は、連続的というよりも時代の要所において断続的に展開されている様相が明らかになった。むしろ弥生・古墳期における瀬戸内ルートの重要性が再確認されているともいえるが、その大動脈といえる瀬戸内ルートの背後である時は独立した動きで、ある時には瀬戸内の補助的役割を担い、東海以東では時に積極的役割を果たしている実態を浮き彫りにできた。
研究成果の概要（英文）：
The *Setonaikai*-Sea was the main route of the cultural exchanges in the west area of Japan from *Yayoi* Period to *Kofun* Period. The Pacifc Route had been the sub-route. But it played the important role of the cultural exchanges occasionally, for example in the initial and the final stage of *Yayoi* Period and in the final stage of *Kofun* Period . And it was one of the important routes in the east area of Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
２００７年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
２００８年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
２００９年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
総　計	14,100,000	4,230,000	18,330,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：太平洋・弥生時代・古墳時代・交流

１．研究開始当初の背景
従来の弥生・古墳時代研究においては、西日本の地域交流路として瀬戸内ならびに日本海のルートが重視されてきた。とくに瀬戸内のルートは東西を結ぶ大動脈であったことは間違いないし、日本海のルートも瀬戸内とは異なる役割を担っていたことが明らかになってきている。その一方で、太平洋を利用した交流の研究は著しく立ち後れてきた。もちろん、局地的あるいはある一時期における文物交流の研究は存在したものの、通時的な太平洋沿岸交流の研究はほとんど行われ

てこなかった。

２．研究の目的

本研究の目的は、南四国地域に研究の主要な軸足を置きつつ、弥生・古墳時代における太平洋ルートの歴史的・文化的役割を明らかにし、さらに進んで中心と地域、地域と地域の関係という視点から日本列島の主要交流ルートが果たした役割について広く比較研究を行うことであった。

３．研究の方法

日常の物資交換に代表されるような基盤的交流と地域間の勢力関係を含んだ政治的交流の二つのレベルにわけて研究を進めた。すなわち前者は石器・土器などの資料であり、後者は大型青銅器・渡来系文物・古墳などの資料である。これらの資料を収集し分析することにより、太平洋沿岸交流の推移に関する情報を整理し、瀬戸内ルートなど他の交通路との比較あるいは比較のための基礎整理を行って太平洋沿岸交流の特質をあらわにするように努めた。

とくに南四国の古墳時代情報は不可欠であったが、とくに古墳の動向がほとんど明らかでなかったため、南四国で地域間交流の要と目される高知市朝倉古墳・香美市大元神社古墳の発掘調査を実施した。

４．研究成果

(1) 研究成果の概要

研究を進めるうちに、南四国を中心とした太平洋沿岸交流は、連続的というよりも時代の要所において断続的に展開されている様相が明らかになってきた。(2)に概要を示したように報告論考を通読すればそれは明らかとなる。こうした研究を通してみれば、むしろ弥生・古墳期における瀬戸内ルートの重要性が再確認されているともいえるが、その大動脈といえる瀬戸内ルートの背後である時は独立した動きで、ある時には瀬戸内の補助的役割を担い、東海以東では時に積極的役割を果たしている実態を浮き彫りにしたといえよう。

(2) 個別研究の成果

①出原恵三（研究協力者）は、高知県居徳遺跡と田村遺跡を比較する中で、弥生文化は縄文晩期社会とは異なるネットワークで成立したとする。これまで玄界灘で成立した弥生文化が東へ伝播したとの議論が有力であったが、高知県東部平野も含めた中部瀬戸内でこそ弥生文化が成立したというきわめてダイナミックな論を展開した。そのネットワークの中に高知県田村遺跡があるとの評価を行っている。

②寺前直人はその田村遺跡から出土した石器を南九州、紀伊南部のそれと比較し、田村遺跡が大陸系磨製石器の導入において際だった特異な遺跡であることを改めて示した。このことは出原の研究と関わって興味深い。さらに在来系石器では３地域で共通点があることも指摘している。大陸系磨製石器を必ずしも保有しないながらも稲作を生業とし、太平洋沿岸を往来した集団の存在も指摘している。

③福永伸哉は、四国における大型青銅器と前期古墳の分布から弥生時代後期から古墳時代前期におこった政治変動について改めて示すとともに、その政治的変動で果たした瀬戸内ルートと太平洋沿岸ルートの役割について考察し、畿内の政治変動と太平洋ルートとの浮沈について関わりがあることを示している。中央政権の政治変動という政治的影響を東西交通路が強く受け、メインルートの転換があった可能性を指摘し、南四国がその影響を受けていることを明らかにしたのであった。南四国には前半期古墳が少ないことが指摘されてきたが、その背景には政治変動と交通路の関係があった可能性が示されたのである。

④杉井健は、高知県下の甑と竈のあり方を整理しつつその成果を九州と比較し、九州と関わりを持ちながらも九州とは異なる周辺域としての性格を高知の甑や竈のあり方にみる。さらに甑や竈の導入と横穴式石室の導入の関連を示唆しているが、これは清家の研究とふれあうところであり、墓制研究と生活様式研究の総合的研究に対する必要性を改めて示していよう。

⑤橋本達也は古墳時代前半期において九州東岸の首長層が広域ネットワークを形成して瀬戸内ルートと繋がることを示す。またそのルートを九州西岸ルート・太平洋ルートと比較検討し、古墳時代前半期の広域交流を概括している。その中で南四国がどのような交流関係に中に位置づけられるかも指摘している。当該期が瀬戸内を主流のルートとしている様子がうかがえる。福永・清家論文の成果と比較すると、太平洋沿岸ルートが補助的役割を担いつつ、文化交流・政治交流において時に重要な役割を果たしていたという実態が浮かび上がるであろう。

⑥菊地芳朗は、東北～北海道と九州南部の刀剣について比較研究を行い、前者は太平洋ルートを通じた交流が、後者では複数のルートが錯綜する形で物資流通が行われたとする。また、両者の比較から日本列島に国家秩序が整えられる際の共通の現象を垣間見る。

⑦清家は、南四国の横穴式石室を分析する中で、６世紀末から７世紀初頭の一時点において太平洋に面した地域で交流が行われたことを指摘し、その背景には瀬戸内ルートを掌握していた勢力とは異なる勢力が関わっ

ていた可能性を示している。またその交流は対等なそれではなく、高知平野を中心にした中心周縁関係が存在すると指摘している。

しかし、太平洋沿岸の交流はきわめて一時的なものであった。７世紀前葉には、横穴式石室が南四国の東西から姿を消し、少なくとも太平洋沿岸交流の存在は古墳からは伺い得ない。その一方で高知平野西端に朝倉古墳が出現する。これまで大型古墳が存在しないエリアに朝倉古墳は出現する。朝倉古墳の石室は瀬戸内の系譜を引き、地理的にも朝倉古墳の東には仁淀川があり、それを遡上すると伊予に出るという環境にある。新たな勢力が高知に出現し、瀬戸内の勢力と関係を結んだ可能性が考えられよう。南四国が瀬戸内交通の中に包含された可能性をこのことは示し、それが原因となって太平洋沿岸交流が衰退したとした。

⑧鈴木一有（研究協力者）は、紀伊から東海における横穴式石室・鏡・岩陰遺跡など多様な資料を分析し、５世紀後葉に遠隔地交流が活発化した様相を指摘した。その中で海上交通の重要性を指摘している。

⑨発掘調査の成果

大元神社古墳の発掘調査　高知県香美市土佐山田町の古墳を調査した。直径 18ｍの円墳であり、横穴式石室の痕跡を確認した。特筆すべきは子持ち器台の出土であり、装飾付須恵器の存在から高知平野の階層構造に迫れる知見を得た。

朝倉古墳の発掘調査　高知市の横穴式石室墳を調査した。墳丘は破壊されていたが、瀬戸内系の石室を持つことと、高知県で最後の大型古墳であることを明らかにした。また石室規模も確定し、出土須恵器からもその編年的位置付けも確かなものとなり TK217 型式期、7 世紀前半であることが確実となった。

この２古墳の調査により、TK209 型式段階の南四国太平洋沿岸には、畿内系石室が東西に分布するが、TK217 段階には瀬戸内系の石室が高知市に出現し、この時期に太平洋沿岸ルートの役割が変化したことが明かとなった。この調査成果は、研究代表者の研究に結実した。また、この調査成果は、すでに報告書あるいは概要報告書として公開を果たしている。

⑩小結

こうした研究を総括すると東西交通路として大動脈の瀬戸内海が存在する西日本では、太平洋沿岸ルートは、時に瀬戸内ルートの補助的役割を担いつつ、瀬戸内ルートと異なる役割を時に果たしていた様相が浮かび上がった。紀伊以東では、一つの主要な交通ルートとして古墳時代には利用が行われていた様相を明らかにしえたと言えよう。

（３）得られた成果の国内外におけるインパクト

本研究は弥生～古墳期の太平洋沿岸交流に関する研究としては、ほぼ初めての研究プロジェクトであった。本研究により太平洋沿岸交流が注目され、研究が今後活性化する可能性がある。そうした意味では本研究はパイオニア的地位を占めたと言えよう。

また、南四国の研究自体がこれまで数少なかったところであるので、古墳・青銅器・土器・石器の諸点から研究が深められたことにより、研究の空白部分を充填し、かつ重厚にすることができたと言えよう。この点も今後南四国の研究自体を活性化させるという点で意義深い。

朝倉古墳の調査は中四国終末期古墳を研究する上で核となる調査となった。近年、角塚型とよばれる石室が注目されているが、出土遺物が少なく年代的位置付けが明らかとなっていなかった。本科学研究費の調査により、朝倉古墳はその年代の核となる資料となったのである。

（４）まとめと今後の課題

太平洋沿岸地域をめぐる文物交流研究それ自体が少なかったこともあるが、それぞれの研究は斬新な切り口のものが多く、東北から九州に至るまでの太平洋ルートの役割をそれぞれの地域で明らかにしつつ、地域ごとで太平洋ルートの役割の比重が異なっている点も明らかにできた。

また、太平洋沿岸交流のあり方は、ただ太平洋沿岸地域だけの問題ではなく、瀬戸内ルートなどの他の交通路との関わり、あるいは時の中央政権の動向と深く関わることも示したこともインパクトのあることであろう。

本研究は南四国に軸足を置いているため、弥生時代から古墳時代における通時的研究は西日本にとどまり、とくに東海以東は古墳時代の研究が主であった。東海以東においても通時的研究を今後深めていく必要があるだろう。

本研究で示した新たな切り口をてこにして文物交流の比較研究あるいは太平洋沿岸地域の研究をさらに進めていく所存である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　21 件）

①　寺前直人「石器からみた弥生時代開始期の交流　－西日本太平洋沿岸地域を中心として－」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係』高知大学人文社会科学系　2010 年　pp.39-53　査読無

②　福永伸哉「青銅器から見た古墳成立期の太平洋ルート」『弥生・古墳時代における太

平洋ルートの文物交流と地域間関係』高知大学人文社会科学系　2010 年　pp.55-70　査読無
③　杉井　健「高知県地域における甑形土器と竈の動向」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係』高知大学人文社会科学系　2010 年　pp.71-89　査読無
④　橋本達也「古墳時代交流の豊後水道・日向灘ルート」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係』高知大学人文社会科学系　2010 年　pp.91-107　査読無
⑤　菊地芳朗「古墳時代終末期における日本列島周縁部の太平洋沿岸交流－副葬刀剣をもとに－」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係』高知大学人文社会科学系　2010 年　pp.109-130　査読無
⑥　清家　章「横穴式石室にみる南四国太平洋沿岸地域の関係」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係』高知大学人文社会科学系　2010 年　pp.131-143　査読無
⑦　清家　章「古墳時代における父系化の過程」『考古学研究』56 巻３号　考古学研究会、2009 年 pp.55-70　査読有
⑧　清家　章『高知県後期古墳資料集』Ⅰ　高知大学考古学調査研究報告第７冊　高知大学人文学部考古学研究室　2009 年　総 62 頁　査読無
⑨　福永伸哉「青銅鏡の政治性萌芽」『弥生時代の考古学２儀礼と権力』同成社　2008 年 pp.112-126　査読無
⑩　橋本達也「岡崎 18 号墳出土鉄製品と肝属平野周辺域をめぐる広域交流」『大隅串良岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館　2008 年 pp.47-58　査読無
⑪　清家　章「古墳から見た四国の一体性」『地方史研究』328 号　地方史研究協議会、2007 年 pp.10-13　査読無
⑫　清家　章「高知平野における大型後期古墳の動向」『考古学論究-小笠原好彦先生退任記念論集-』真陽社　2007 年 pp.447-464　査読無
⑬　福永伸哉「前方後円墳成立期の東四国と畿内」『鳴門史学』第 21 集 pp.1-16 2007 年　査読有
⑭　福永伸哉「副葬鏡群からみた前方後円墳成立期の近江」『考古学論究-小笠原好彦先生退任念論集-』真陽社　2007 年 pp.145-164 査読無
⑮　橋本達也「九州の中期甲冑」『九州島における中期古墳の再検討』pp.47-58 2007 年 査読無
⑯　菊地芳朗「古墳時代の会津」『会津若松市史』１巻　会津若松市　2007 年 pp.44-58 査読無
⑰　寺前直人「畿内型横穴式石室の基礎構造」『考古学論究-小笠原好彦先生退任記念論集-』真陽社　2007 年　pp.335-360　査読無
⑱. 寺前直人 「ヤジリと高地性集落」『古代文化』 第 58 巻Ⅱ号　2006 年　査読無

〔学会発表〕(計　８件)
①　清家章・寺前直人・出原恵三・福永伸哉・鈴木一有『科学研究費成果公開シンポジウム弥生・古墳期における太平洋沿岸交流』2009 年 11 月７日　高知大学（このシンポジウムにて４本の発表)
②　清家章「高知市朝倉古墳の調査成果」考古学研究会岡山例会　2009 年1 月10 日　岡山大学
③　清家章「香美市大元神社古墳の調査成果」高知考古学研究会　2008 年7 月19 日高知県文化財団埋蔵文化財センター
④　寺前直人「太平洋ルートと弥生石器の伝播」科学研究費研究会　2007 年11 月17 日　高知大学

〔図書〕(計　１件)
①　杉井健ほか編『上天草いにしえの暮らしと古墳』上天草市　2007 年 pp.123-345

〔その他〕
①　毎日新聞 2008 年８月 26 日（火）朝刊 23 面「県内最後の大型古墳　朝倉古墳高知大発掘調査」
②　高知新聞 2007 年９月 14 日朝刊「1400 年前の須恵器片出土高知大調査　数百点、装飾仕様も」
③　高知新聞 2006 年９月１日朝刊「香美市・大元神社古墳　直径 18 メートルの円墳と判明」

６．研究組織
(1)研究代表者
清家　章（SEIKE　AKIRA）
高知大学・教育研究部・人文社会科学系・教授
研究者番号：４０３０３９９５

(2)研究分担者
福永　伸哉（FUKUNAGA　SIN’YA）
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：５０１８９９５８

杉井　健（SUGII KEN）
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：９０２６３１７８

菊地　芳朗(KIKUTI　YOSIO)
福島大学・行政政策学類・准教授
研究者番号：１０３７５３４７

橋本　達也（HASHIMOTO TATUYA）
鹿児島大学・総合研究博物館・准教授
研究者番号：２０２７４２６９

寺前　直人（TERAMAE　NAOTO）
大阪大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号：５０３７２６０２

(3)連携研究者
なし